

## 【キーワード】

〔施設種別〕 高齢者施設 障がい者施設 子ども施設 住宅  
 〔運営主体〕 市区町村 法人 NPO 個人 〔補助金〕 内閣府 国土交通省 厚生労働省  
 〔建物形式〕 1棟単体型 複数棟集合型 団地型 〔建物状況〕 新築 増築 改修 一部改修 既存  
 〔対象者〕 高齢者 障がい者 子ども ファミリー 多世代



写真1. 外観写真

小児がんをはじめとした医療ケアが必要な子ども・若年成人とその家族に、治療や看護を提供できる自宅と病院の中間的施設として開設された施設。回復期にあるが自宅では点滴などの処置をする難しさ、病院ではアットホームな感覚が得られないという現状を踏まえ、家族と一緒にいられる環境とその愛情が回復につながるという理念による。採光と明暗のコントロールが建築的特徴。

## ■施設情報

所在地：兵庫県神戸市中央区港島中町8丁目5-3  
 施設種別：共同住宅，有床診療所  
 運営主体：NPO法人 チャイルド・ケモ・ハウス，公益財団法人 チャイルド・ケモ・サポート基金  
 設計：株式会社手塚建築研究所  
 施工：積水ハウス  
 敷地面積：3500.00m<sup>2</sup>  
 建築面積：1931.50m<sup>2</sup>  
 構造・階数：鉄骨造・平屋建て  
 居室数：19戸  
 運営開始：2013年5月9日  
 見学者：古賀政好，千葉紗央里（2013.0427 プレ・オープン），熊本実桜（2014.0910）

## ■運営概要

チャイルド・ケモ・ハウスは小児がん患者とその家族らにとっての病院と家の両者のウイークポイントを補う中間施設として開設された。病院ではわずか2畳半の病床で、置き場のないおもちゃや生活用品と一緒に押し込まれながら病気と闘いながら心身の成長と学びを行わなければならない。その付き添いをする親族は、小さな簡



図1. 周辺状況 (Googlemapより)

周辺には医療機関や研究機関が並んでいる。施設へはポートライナー市民広場駅，または医療センター駅から約8分の徒歩を要している。



写真2. 全景

開発が進んでいるエリアで，周辺には中高層の医療施設等が並ぶため，平屋建ての当施設の部分は空が抜けたような印象である。



写真3. ハウス内部の様子

手前が患児のベッドで奥が家族のベッドとような使い方をしている。キッチン是一般家庭の料理を行うことのできるキッチンが施されている。



写真4. 住まい（ハウス）から見る庭

各ハウスには家のような雰囲気と認識を持ってもらうため庭も各住まいに面している。

易ベットの薄一枚のカーテンで隔てられていることから隣を気遣い、熟睡できないという環境ながらも我が子を案じ、いたわり、励ましている。法的に基準看護の病院に付き添いの親族は宿泊しないことになっているので、大人サイズのベッドは持ち込むことができないというのが現状である（基準上、小児のみの病室面積は大人病室の2/3でよい）。

このような病院の現状から患者のこどもの多くが「家に帰りたい」と嘆く。しかし自宅での治療・療養は点滴や人工呼吸器等の医療機材の搬入・使用の難しさ、訪問看護・在宅診療等による医療行為が提供しにくい、その制度や人員が不足しているという課題から実行には踏み込めない状況だ。このようなジレンマを打開するべく「普通の家族が普通に持っている当たり前の温かみが欲しい。」という声に応え、7年のプロジェクトを得て開設されたのが本施設である。

チャイルドケモハウスは家が病院を取り囲む構成になっており、それぞれの家には個別の玄関があり、親や兄弟は毎日でも入院中のこどもと会うことができる。施設内にはキッチンも施されており親族手作りの食事と一緒にとることができる。施設運営にはスポンサー及び無



図2. 配置図兼一階平面図（ケモハウス HP より引用）

部屋は葡萄の房のように5軒ごとに寄り集まっている。寄り集まった中心には小さな広場が出来上がっている。5というのは人が助けあう都合の良い数である。この構成は視認性が良く看護という観点からも都合が良い。内部には廊下らしい廊下がない。建物が思い思いに寄り集まって出来た隙間を巡る構成で、人溜まりが生まれそうな入隅にはトップライトが配置されている。



数の個人による募金が当てられている。

## ■施設内部の状況

施設にはこどもの患者とその親族と一緒に暮らすことのできる「ハウス」が19戸あり、東側に配置されている。ハウスは自宅のような環境を作るべく各ハウスごとの庭が設置されている。ハウス内には施設の共同キッチンとは別に簡易型のキッチンが備えられていることも特徴の一つである。各ハウスはプレイルームやデイルーム、レストランなどで構成される共用空間が連なるように配置されている。プレイルームやデイルームではボール遊び等の大きな動きを有する遊びも対応できるような広さと天井高が確保され、吹抜けによって照らされている。多目的室は、患者の学びたいという願望に応え「チャイケモようちえん」と称した学習室として開かれている。一日の活動を施設内で完結することのできる環境と仕組みづくりが行われている。

(以上、作成者：東京電機大学 榎村賢 2020.05)

## ■見学時の設計者へのヒアリング

(2013年4月27日、オープニング時)

### 1. 全体的な概要

7年計画で形も区分も初期の構想とは変化しながら設計を行ってきた。建築基準法では、集合住宅と診療所と飲食店の複合施設という分類となっており、診療所ということもあり19床で構想してきた名残があるため、19家族構成となっている。建物内が一つの村のような感じとして、各住まい1つひとつの標識に番号や名前が入れられたらよいと考えている。19家族分の住まいは兄弟一緒に住めるような住まいとして設計を行ったという。

一方で車いすや重度の子を想定したつくりとはしていない。法規の関係で各住まいに有線式のナースコールは設置を行えず、代わりに無線式のリモコンのようなもの

## 参考文献

- 1) チャイルド・ケモ・ハウス HP (<http://www.kemohouse.jp/index.html>) 2020年5月23日参照
- 2) 神戸のタウン誌 / 月刊神戸っ子 記事 (<https://kobecco.hpg.co.jp/13210/>) 2020年5月23日参照



写真5. プレイルーム

ボール遊びなどの大きな動きにも対応できるような広さと天井高が設けられている。中庭と吹抜けによる自然光の採光によって部屋が照らされるよう白壁となっている。



写真6. 多目的室

多目的室はチャイケモようちえんとして学習室のように使用されている。



写真7. 共用廊下部

共用廊下はストレッチャーや車いす等が色々ぶつかることが想定されるため壁にタモ材を付けている。ハウス内は住まいとしての印象を崩さないため設置していない。



写真8. レストラン

エントランス近く、駐車場に隣接して設けられたレストランはその前のポーチに対して全面的に開くことができるように設計されており、イベント開催などができるようになっている。



写真9. 中庭に面した小さなたまり場

ゆったりとしたソファが置かれたスペース。多目的室の前に位置し、中庭を挟んでディスプレイスペースが見える。人の集まりから少し距離を取れる場所である。

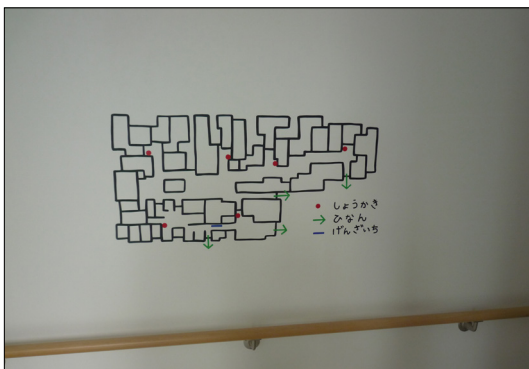


写真10. 壁面の避難経路図

消防法上必要になる避難経路図も、サインとしてデザインされ、子どもにとっても、生活の場としてもなじみやすいような配慮がなされている。

をナースコールかわりとして各部屋に配置されている。

家具に関して手塚事務所では家具も入れて建物を提供している。1家族は長くても半年しかいないため自分たちの家具を持ち込むかどうかはわからない。家具は無印良品が寄付をしてくれており、各住まいには無印良品の家具を入れている。

## 2. 共用部に関して

プレイルームは、子どもたちが集まって遊ぶため、おもちゃを置いている。おもちゃや部屋の家具は寄付金で賄っていくため、それ次第でもある。壁は色彩によって明るくするという事は会社として行っていない。

照明や自然光によって部屋内を明るくするため、白壁にしている。プレイルームに面して共用キッチンを設けており、そこで他の家族との関わりも出てくると思う。また、廊下のコーナー部の上部を天窗にして、光を落とすことで、そこに人が滞在する仕掛けをしている。そのため、コーナー部だけ床暖房にして、限られた予算内で快適性を得られるように配慮している。各住まいとプレイルームには床暖房が入っている。共用廊下はストレッチャーや車いす等が色々ぶつかることが想定されるため壁にタモ材を付けているが、住まい内はあくまでも自宅としての認識を得ることを目的としているため、付けていない。

## 3. 住まい（ハウス）に関して

設備の特徴として、ペリメーターゾーンに空調を当ててコールドドラフト等へ対応している。各住まいの一部の天井高を高くして天井の懐を厚くしている。その高い位置に空調設備を設置することで、冷たい風がゆっくり下に落ちてくるようにしている。一部の収納棚内の天井に花粉やほこりの除去ができる除去装置を入れている。電球はLEDと白熱球の2種類を使っている。白熱球は調光できるため、ベッドの手元照明に用いている。そのほかはLEDである。

各住まいに入って、手前が患児のベッドで奥が家族の

ベッドである。どの部屋も患児のベッドの位置をまず決め、そこに合わせてトップライトを設けている。眩しくないように光が拡散する仕組みにしている。また、ベッド上での処置の際に暗くなりすぎないように近くに処置灯も準備している。各住まいのキッチン普通の料理ができるようになっている。扉の有効寸法は1200mmで、ストレッチャーを寄せられるように作っている。小さい車いすでの生活は想定してつくっている。浴室と便所に入る扉は三枚扉として幅を確保できるようにした。

各住まいには玄関を設けており、家族はそこから出入りができる。来客は施設正面から入ってもらう。オートロックにしている。1200mm程度の位置に鍵を高い位置につけているため小さい子が出ていくことはない。

各住まいに目印等をつけるにしてもルールを決めないと混雑する。建築設計として、運営も踏まえてどこまで介入していくかにもよる。

(見学メモ作成：東京電機大学 古賀政好 2013.0427,  
校正・加筆：東京電機大学 山田あすか 2020.1112)



写真 11. 診察室

複数ある診察室は小部屋としてつくられ、それぞれ少しずつ設えが異なり、手洗いのほか、ソファ、ベッド、絨毯等が設えられている。



写真 12. ロビー

エントランスから入ると、ロビーに遊具が置かれ、原色の飾りが取り付けられた電球が低い位置に下がっているなど、こどもの恐怖心を和らげる配慮がなされている。





**写真 13. 明暗のメリハリのある廊下**

廊下は壁面に取り付けられた照明だけで敢えて照度が低く設定され、突き当たりのスペースの天窓から差し込む光が奥に誘引する。



**写真 14. ハウス（宿泊室）**

各ハウスには家族で休めるベッドがあり、その位置を避けて天窓が設けられている。



**写真 15. ハウスの水回り**

家庭らしい風呂、トイレ、洗面台が設えられている。



**写真 16. ハウスのキッチン**

各ハウスで配置は異なるが、これはアイランド型でつくられたキッチンのあるハウス。水回りから連続し、洗濯機もキッチンに設えられ、家事動線がコンパクトにつくられている。



**写真 17. 広いダイニングがあるハウス**

6名で使えるダイニングがあるハウス。ハウスごとに家具の配置が異なる。



**写真 18. ハウスの窓と玄関**

各ハウスから外へのつながりを意識できるよう、開口が広くとられている。各ハウスに、敷地周辺にぐるりと巡らされた小径から直接入ることができる玄関が設けられていることも大きな特徴である。

